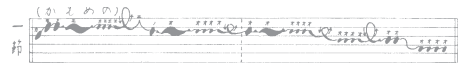


やんさノエ

会報

2007 No.7



発行 江差追分会

2007.3.1

北海道松山郡江差町中歌町193-3

TEL 0139-52-5555

FAX 0139-52-5544

ホームページアドレス <http://www.hakodate.or.jp/oiwake/>



学校の追分教室

所感

江差追分会会長 濱谷一治

今年の江差町は、町の古老に聞いても「こんな冬は経験した事が無い」と言われるくらい、雪の少ない穏やかな冬を迎えました。北国の風物詩とも言える雪かきをする事が殆どないため、その面では楽な冬を過ごしていますが、反面この気候が今後作物などに悪い影響を与えないかと心配になります。

さて、江差追分全国大会も今年で四十五回を迎えます。特に今年には五年に一度の節目の大会で、アトラクションなどを何にするのかと頭を悩ませています。一昨年の検討委員会でも指摘があったように、追分会を取り巻く状況も決して順風満帆なものでは有りませんが、その状況を考えた場合、よりこの大会を次世代に繋げるためのステップにしたいとの思いで一杯になります。

江差町でも小学校から高等学校まで授業や課外活動に取り入れてもらっていますが、それ以外の地方でも同様な話を聞くと、少しずつでは有りますが、若い人達への取り組みが進んでいると感じます。もちろんまだまだ不十分であり、追分会としても大きな課題であるため今後一層強化して行かなければなりませんし、そのためにも全国の皆様のお力を借りることが必要になっていきます。文化は守ると同時に育てていかなければならないの思いを強くしているところです。

第四十四回江差追分全国大会

個性的な声の唄い手が目立つ

一般 寺島絵美さんが姉につぐ優勝 熟年 中村ツマさん 少年 瀧澤朱夏さん



昨年の九月十五日から三日間、例年どおり江差町文化会館を舞台に第四十四回江差追分全国大会と、第十回江差追分熟年大会、同少年大会が華やかに開催された。

大会の席上、表彰を受けた功労者や唄い手の方々の名は別表のとおりで、日ごろから絶え間ない努力と修練を重ねて晴れの荣誉に輝いたこれらの人々の追分節に対する並々ならぬ情熱に対し、改めて心からの拍手を送りたい。

中でも注目を集めたのは、一般の部優勝者の寺島絵美さん（二十一歳、水堀愛好会）で、長年師事してきた藤島重悦師匠が先ごろ死去するなどの不幸に見舞われたにもかかわらず、第四十一回大会に優勝した姉の絵里佳さんに続いての優勝、しかも姉妹ともに少年・一般の両大会を制覇したということ、日ごろから地元の熱い期待を担って唄う乙部の寺島三姉妹の活躍ぶりがひとしお話題になっ

た大会であった。

それとともに熟年の部では、「亡き夫と共に習った追分」を、情感豊かに唄いあげた地元の中村ツマさん（声友会）が、また、少年の部では、伸びやかな美声に加え、節がよくまとまっていた瀧澤朱夏さん（小六、苫小牧）がそれぞれ優勝した。

大会三日目の決選会后、順位の発表に先立って例年のとおり藤田信審査室長（NHK函館放送局放送部長）から審査員を代表して大会全体についての講評が発表された。その要旨は、まず少年の部については「力強い唄い手が多く、追分界の将来が楽しみである」、というのが審査員の一致した意見、ということ、久しぶりに追分界の将来について曙光が見えた思いのする一言であった。

次いで一般の部では、まず唄い手の実力が紙一重で審査が困難であったことが率直に述べられ、しかし、それでも順位をつけないわけにはいかないということ、おおむね次のような趣旨の審査員が理想とする追分像が述べられた。

すなわち、審査員の印象としては、今年の出演者は全体的に個性的な声を持った唄い手が多かった。しかし、

その声が十分に追分情緒の表現に活かされているとは感じられなかったようで、「江差追分の深い情緒や味わいを、もつとよくつかみとって、唄の中にどどん出していってほしい、声だけで流れを作らないで、ノシ、せつどなどの基本となる節を十分に唄いこなした上、最も聴きやすいテンポで唄と伴奏（尺八・三味線）とソイ掛けが、三位一体となって聞こえてくるような唄を目指してほしい」ということであった。

諸般の事情から日ごろ一緒に練習していない唄い手と伴奏者が、にわかには音合わせをして出場せざるを得ない場面もあるようであるが、「唄の情緒や味わいを大切に、基本の節は確実に身につける、声に任せて長々と唄って唄がダレたりしないよう、唄と伴奏とソイ掛けの間の乱れは極力これを避けるべし」という、このたびの講評の中心的内容は、これから頂点を目指す唄い手や伴奏などの関係者にとって、さらに修練を重ね、実践に励むべき目標として、日ごろから重視されるべきであろう。

（取材・館 和夫）

第四十四回 江差追分全国大会入賞者

- 準優勝 福士 優子 (千歳支部)
- 三位 安澤 望 (和春会支部)
- 四位 井上さつき (江友会支部)
- 五位 間島 秀格 (長沼支部)
- 六位 川俣 明彦 (菊水会支部)
- 七位 前川 悦子 (厚沢部支部)
- 八位 間島 正晴 (札幌白石支部)
- 九位 瀧本 豊壽 (深川支部)
- 十位 日和 義貴 (札幌南支部)



江差追分全国大会で優勝した

寺島 美絵さん



「亡くなった師匠と、注がれた。それでも力む姉のおかげです」
優勝が決まった瞬間、情緒あふれる声と流れるような節回しで、寄せが、あふれる大粒の涙で、ては返す彼のイメージをぐしゃぐしゃに崩れた。見事に表現した。

十七日、松山管内江差町で開かれた江差追分の第四十四回全国大会。三をしながら三年前は姉の「三年前の大会で優勝した姉い掛け」を務め、晴れ舞絵里佳さん(三)と、妹真台をそばで眺めた。里絵さん(九)とともに「寺島三姉妹」として知られ、観客の熱い視線がきた。

栄誉に恥じぬ歌を

昨年四月、姉妹三人を育ててくれた師匠の藤島重悦さんが病気で亡くなった。「どうやって練習すればいいのかわからない」。途方に暮れた。約四ヶ月間、練習が手に付かなかった。

「そろそろ始めななきゃ」。そう言って勇気をくれたのは姉だった。週二回、姉を師匠に自宅でのけいこが始まった。厳しかったが「一生懸命教えてくれたからこそ、頑張れた」。今大会では姉に「そい掛け」を頼み、見守ってもらった。

ベテラン勢を退けての日本一。恥はかけない。みんなに喜んでもらえる歌をうたい続けたい。両親と姉の四人暮らし。乙部町役場で臨時職員として働く。二十一歳。

(細川伸哉)

第十回 江差追分熟年全国大会入賞者



熟年優勝 中村ツマさん

- 準優勝 榎本弥惣七 (網走声友会支部)
 - 三位 菅原 圭一 (札幌白石支部)
 - 四位 細木 利良 (大平原支部)
 - 五位 舟山 マリ (札幌西支部)
 - 六位 本田 勝三 (函館澄声会支部)
 - 七位 田中 吉男 (札幌支部)
 - 八位 田中 光男 (大阪なにわ支部)
 - 九位 岡田 辰雄 (宝優会支部)
 - 十位 石黒 長雄 (留萌支部)
- 審査員特別賞
高井 勲 (ブラジル支部)

江差追分会表彰

- 功労表彰 成田 正雄 (岩見沢市)
- 豊田 礼子 (帯広市)
- 感謝状 森 弘文 (函館市)
- 北川 昭 (函館市)
- 奨励賞 函館西支部 (函館市)
- 苫小牧観昇会支部 (苫小牧市)

第十回 江差追分少年全国大会入賞者



少年優勝 瀧澤朱夏さん

- 準優勝 福田 光 (厚沢部美和支部)
 - 三位 長谷川有沙 (水堀愛好会支部)
 - 四位 植田 玲奈 (大和菊華会支部)
 - 五位 三谷 葵 (札幌南支部)
 - 六位 榎林 佳世 (札幌南支部)
 - 七位 川畑 菜波 (和春会支部)
 - 八位 黒森ひかる (札幌南支部)
 - 九位 佐々 香奈 (旭川北支部)
 - 十位 小笠原果実 (水堀愛好会支部)
- 審査員奨励賞

- 近藤 早梨 (愛知三河支部)
- 宮本真理奈 (早来町清志会支部)
- 大木 風香 (札幌白石支部)
- 須藤 栞 (千歳支部)
- 高橋 紗里 (千歳支部)

聖地・江差に少年の留学……………岩淵啓介

江差という土地は「聖地」ではな
かるうか。聖地ゆえに名歌『江差追
分』が発祥し成長した。

聖地というのは、たんなる形容詞
ではない。土地の在り様そのものを
指す具体的な名称である。

聖地といえ、四国の遍路地八十
八箇所、紀州熊野の古道。九州・周
防灘に面した宇佐八幡、玄海灘の宗
像大社の沖の島、出雲大社、伊勢神
宮、京都の伏見稲荷。富士山、伯耆
大山、津軽の岩木山。さまざまな聖
地と、その由来を思い浮かべる。

聖地には、その土地に特有な不可
思議な力が働いている。

蝦夷地の江差は、上ノ国の夷王山
(医王山)、篠山(稲荷)、乙部の
九郎岳、太田山(太田権現)の聖な
る山々に囲まれている。

江差の鷗(かもめ)島は「カムイ
島」だった。島を焦点にして、江差
港(湾)は緩やかな「巴」形、「勾
玉」形を描いていると見られる。

神奈川県藤沢市の片瀬海岸の江ノ
島(弁財天)の地形にも似通う。

世界史上の一大聖地は、パレスチ
ナのエルサレムだろう。ユダヤ教、

キリスト教、イスラム教の三つの世
界宗教が聖地として仰ぐ。極く古く
は、バハイ教、ドゥルズ教など百以
上の宗教の聖地だったという(植島
啓司『聖地の想像力』集英社新書)

今から二十数年前、転勤して初め
て江差に住みはじめたころ、ある夏
の午後、どこからともなく、笛と太
鼓の音が風に乗って町中に漂って
るのに気付いた。

「ヒュール、ヒュララ」「ドーン・
ドーン、テン・テン」

音を頼りに尋ねて行ってみると、
茂尻町の銭湯「茂尻湯」わきの空き
地とか、姥神町の国道ぞいの萩原鉄
工場の前庭とか、本町の法華寺の鐘
樓の釣り鐘の下とかに、小学生、中
学生、高校生の男の子、女の子たち
が集まっている。

莫塵を敷いて、木枠の台を置き、
大太鼓、小太鼓を据えている。それ
ぞれ手に二本の丸棒の太鼓の撥を握
り、また横笛を構えている。

だれが指導するともなく、習うで
もなく、なに気なく順番に太鼓を打
って、練習を続けている。

太鼓の前に膝を折って正座し、右

腕をすくつと上に伸ばし、小太鼓を
「トーン」と打つ。次に左腕を差し
上げ、「トーン」と打つ。三番目に
両腕を揃えて差し上げ、横に振り下
げ、わきの大太鼓を「ドーン・ドー
ン」と二回打つ。ゆっくりとした呼吸
で打ちつづける。

その傍で、「ツールツール、ツ
ール・ルシャ」。笛の練習を行う。

姥神大神宮の祭典の一月前のこと
だった。こうして、笛と太鼓の祭り
囃子が、子供から子供へ、世代から
世代へと伝承されて行く。

男の子にも女の子にも太鼓打ちと
笛吹きが身につけてしまふ。

将来、どこで暮らそうが子供のとき
に覚えた音曲が、故郷そのものとし
て一生ついて回る。幸せな伝承だ。

これこそ江差が「音曲の郷」であ
り、江差追分の「聖地」であること
の証明ではなからうか。

松村隆著『たば風に唄う 江差追
分 青坂満』(北海道新聞、200
6年4月刊)を読んでみよう。

「かもめ島の秋の弁天祭りには漁師
たちが集まる。祝い酒に酔い、興じ
て唄いだす。小学校にも行っていな
い子どもが一人、大人たちのそばに
寄ってきて、熱心に追分を聴いてい

る。漁師たちは、この童(わらし)
追分わかるんだがや、と驚く」

この子供が、ご存じ青坂満さん。
全国各地の江差追分支部には、江
差追分を習っている子供たちが、そ
れなりに居るであろう。この子たち
が未来の江差追分の大切な担い手の
基盤になるだろう。

この子供たちに、江差追分の「聖
地・江差」を体験させたい。この土
地で名人の師匠たちに直接会い、唄
の手解きを受ける。なによりも、江
差という土地の持つ、唄の靈気のよ
うなものを感受して欲しい。

いわば国内留学というか海浜学校
というか、江差追分の聖地への巡礼
ならぬ留学、体験学習なのである。

子供たちにとって、この体験は一
生の宝になるであろう。

必ずしも、江差追分少年全国大会
での優勝を目指すような、エリート
育成の意図は持たない。ただ遊びを
兼ねた体験、体感なのである。

子供の人数、選定方法、日程、付
き添いの師匠・両親の旅費、宿泊費
などの課題も多い。

永い目でみた基盤づくりとして考
えてみたい。

(学芸部門理事)

追分資料の収集と活用の眼目……館 和夫

昭和五十七年の春、江差追分会館が開館し、「追分文庫」が発足してから、もう随分の月日が経つ。この間、人々の理解と協力によって多くの図書、写真、音源などが集まり、記念誌の発行や日頃の普及宣伝活動、あるいは追分関係行事の広報等に不可欠の情報源としての役割を果たしてきたように思う。民謡関係者のいろいろな照会に応じるほか、学者の資料収集や、学生の論文作成に協力した、というようなこともあった。

そのほか千葉県旭市の飯島幸平氏から八〇〇枚におよぶ追分レコードコレクションの寄贈を受けたり、高根温泉津町在住の工通忠孝氏の遺族から天保年間に記された「松前歌」を含む民謡書留を借用して複本を造った、というような思い出深い出来事もあった。

しかし、である。時代の変り目は早く、波は常にとうとうと動いている。買った魚も放っておけば、あっという間に腐るか干物になってしまいう道理で、集めて保存するばかりでなく、日頃から本当の意味で活用す

るためにはどうしたらよいか、常に考える必要がある。

収集する対象も単に古いもの、珍しいものというだけでなく、相対的に、いま求められているもの、将来、ますます重要になってくるもの、という観点から、タイミングよく本腰を入れて集めるべきものを決める必要もある。

何の世界でも後継者難が叫ばれ、伝統の保持が難しくなっている現代である。追分界も例外ではなく、若い人達の興味をひき、追分節を「人生の道中歌」として自らの中に取り込み、終生、愛好してもらうためには、ひと工夫もふた工夫も知恵を絞らなければならないのである。

そこで私の日頃の持論を言わせてもらえば、今は何より先ず凝縮された北国の庶民の精神ともいべき追分節の歴史を端的に表したような各種の絵（日本画、洋画、版画、挿絵等の絵巻、冊、色紙等、形態は不問）の収集整備につとめることが肝要のように思う。

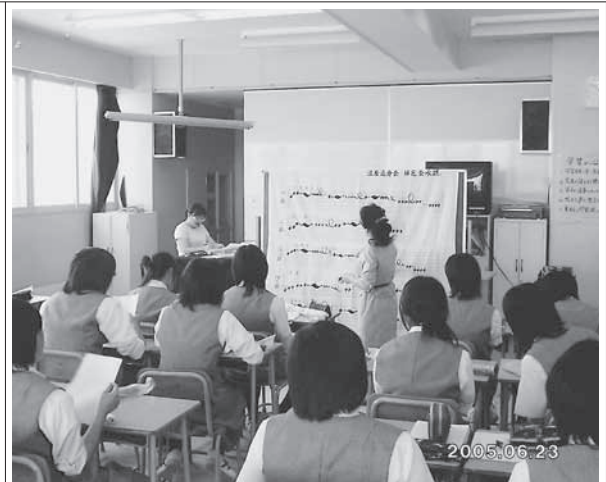
信州の山野をのびやかな声で追分節を唄い流して歩いたその昔の馬子

達、それを三味線に乗せ、諸国の人々に伝えた飯盛り女やゴゼたち、蝦夷地通いの船子や出稼ぎの夫を見送った北国の女達、神威岬の女人通航禁制にからむ義経伝説、明治以降初期の名人の宣伝活動による追分ブームなど、多くの感動的な場面を各種・各形態の絵の連作の形で現したならば、活字の苦手な「映像世代」の若者や、地味な歴史の解説に馴染まない年配の民謡愛好者などにも、この唄の魅力の源泉や現代人の「癒し」にもつながる息の長い生命力が、それこそ「百聞は一見に如かず」で直に伝わり、追分愛好者の底辺を広げることにもつながって行くような気がする。

若い画学生や退職後の団塊の世代で絵心のある人など、現在の追分の普及宣伝の役に立ち、かつ後世に残る貴重な作品ともなるこのような企てに協力してくれる人はいないものか、私は今日もそのような奇特な人が現れることを、密かに期待しながら暮らしている。

（学芸部門理事）

文化庁委嘱 『伝統文化こども教室』に意欲 旭川支部長 佐々木洋子さん



佐々木洋子支部長は旭川市忠和中学校で、民謡や三味線太鼓など和楽器邦楽の指導を長年つづけてきたが、なかでも特に伝統文化として評価の高い江差追分の指導に力を注いできた。「江差追分は北国の生活から生れた人生の唄」という追分に秘められた奥の深さを子どもたちに伝えたいとつとめてきた。

平成十八年十一月より二年生全員一〇〇名に三十時間指導に集中している。

後継者育成を

「江差追分・みんなよう教室」を開催

町内の小学生に地元の郷土芸能に親しんでもらおうと、江差町（追分会館）が企画し、「江差追分・みんなよう教室」が平成十九年一月八日から十六日の中の四日間開催されました。

町内の全小学校に募集をしたところ、一年生から六年生までの十三名



の募集がありました。追分会館職員の寺島絵里佳、井上さつき両講師の指導で、子供達は、江差追分や道南ナット節、ソーラン節、伴奏の太鼓練習を行いました。

最終日には、練習の成果を発表するミニミニ発表会が追分会館演習室で行われ、元気な歌声が館内いっばいに響いていました。また、江差餅つき囃子のメロディーに合わせて全員で餅つきをし、つくたてのおもちを味わいました。

参加した子供達の殆どが「楽しかった」「また来たい」、そのうち何人かは「これを機会に江差追分を習ってみたい」という子もおり、今回初めて企画した事業は大成功に終了しました。

また、町教育委員会と協力し、町内小中学校への追分指導（師匠派遣）も実施するなど、追分会会員の高齢化が進む中、江差追分のファン層拡大に期待が膨らみます。

江差追分渡島協十八年度総会終了する

第三回発表大会、三月十八日に決定
林清作さん、優勝旗三本寄贈（二十五万円相当）

江差追分渡島協議会は、平成十八年十二月十日、函館市昭和町会館に於いて、平成十八年度総会を役員及び会員約四十名が出席し開催された。

総会は、石田盛一副会長の開会の挨拶で始まり、議長に山内藤一さんを選出し進化した。市戸会長は挨拶の中で、林清作さんより優勝旗三本（二十五万相当）が寄贈されたことに

感謝の言葉を述べた。

続いて林清作さんより優勝旗三本（寿年の部・熟年の部・一般の部）が、市戸会長に手渡され、出席された会員から大きな拍手が沸き起こった。

引き続き議事に入り、十七年度事業経過報告、収支決算報告及び監査報告が承認された。続く議案では十八年度事業計画案、第三回発表大会を平成十九年三月十八日（日）、函館市公民館で開催されることを決定。収支予算案では、松倉武次監事、佐藤隆広副会長からの寄付を、特別会計として積み立てることを承認された。

役員改選では、会長・市戸脩（再）、副会長・石田盛一（再）、佐藤隆広（再）、事務局長（会計兼務）・内村徳蔵（再）、監事・野村勝繁（再）、松倉武次（新）のとおりに改選され、満場一致で信任された。

最後に佐藤隆広副会長の閉会のことばで、十八年度総会が終了した。

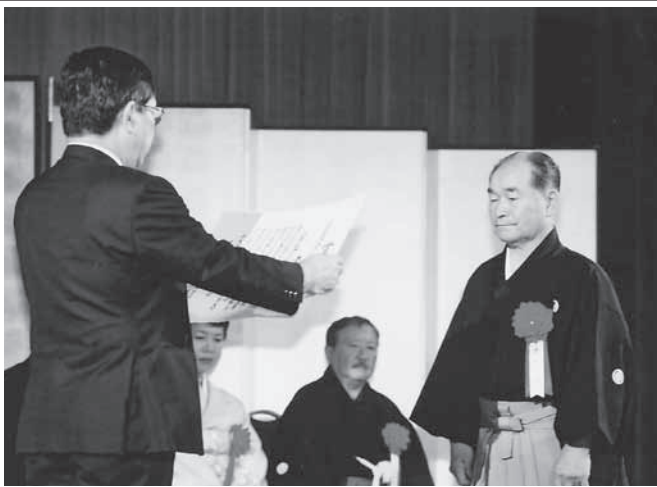


青坂上席師匠が

「伝統文化ポौरラ賞」地域賞を受賞

わが国の伝統文化に貢献され、今後も活躍が期待できる個人または団体に對し、更なる活躍と業績の向上を奨励することを目的に贈られる第二十六回「伝統文化ポौरラ賞」地域賞（財ポौरラ伝統文化振興財団）に江差追分会上席師匠の青坂満氏が選出され、十月十二日東京において贈呈式が行われました。

この地域賞は、全国四ブロックよ



り選出され、二個人二団体に贈られました。青坂氏は北海道・東北ブロックより江差追分の伝承・育成に地道に努力を重ね、優れた業績が認められ受賞されました。

受賞記念の催しでは、関東地区運営協議会の皆様（尺八／佐藤兼松・三味線／杉本武志・ソイ掛け／伊藤良三）の伴奏の協力を得て、朗々と江差追分を唄いあげ会場より大きな拍手を浴びていました。

受賞された青坂氏は、「未だに真の追分になることはできませんが、自分の心になりたいと、今後も一生励んでまいれる所存でございます」と受賞の言葉を述べておりました。おめでとうございます。

ご寄付ありがとうございました

平成十八年十月十七日、青坂上席師匠より、「伝統文化ポौरラ賞」副賞金の一部五万円を「江差追分会振興のため」にご寄付いただきました。

追分会として、有効に活用させていただきます。ありがとうございました。



事務局より

「第七回地域伝統芸能まつり」

番組放送予定について

二月二十四日、二十五日に東京NHKホールにおいて行われた、第七回地域伝統芸能まつりに「江差追分」が出演（唄・寺島絵里佳）しました。その模様を収録した番組が次の放送日（予定）となります。是非ご覧ください。

○三月十日（土）

午後一時三十分～五時 B S 2

○三月十八日（日）

午後三時～五時 教育テレビ

○三月三十一日（土）

午後三時～五時 ハイビジョン

江差追分会

平成十九年度事業計画（予定）

○平成十九年度江差追分会

第一回理事会・総会

平成十九年四月二十二日

○平成十九年度第二回理事会

平成十九年七月十四日

○第四十五回江差追分全国大会

平成十九年九月二十一日～二十三日

○江差追分会師匠会研修会

第一回

平成十九年十月十三日・十四日

第二回

平成二十年二月十七日

○江差追分会師匠会総会

平成二十年二月十七日

【編集】 岩淵啓介・松村 隆

館 和夫・高田 裕

【企画】 西谷和夫・中川 智

澤田博生